

古典に学ぶ仕事術 自分を磨くための言葉

『孫子』は社会を勝ち抜くための教え。『論語』は自身の人間性を高めるための教え。どちらも古くから伝えられ、現代のビジネスシーンにも欠かせない名言の宝庫だ。

「彼を知り己を知らば、百戦して殆（あや）うからず」

おそらく『孫子』の中でも最も有名な言葉だろう。「敵の戦力を知り、味方の戦力を知っていれば百回戦っても危険になることはない」という。『孫子』の第三篇「謀攻篇」にて、戦いに挑む前の心得を述べたものだが、何も戦争に限ったことではない。相手と自分の長所短所を見極めて事を処すれば、あらゆるシーンで通用する金言といえる。

情報化社会において、相手方の正しい情報を得ることは大前提だ。まず敵のことを知るのが先決といえる。しかし、「灯台下暗し」ともいうように、自分のことは意外とよく分からないもの。相手のことを知っていても、自分のことが分かっていなければ成功はおぼつかない。自分を知ることは、何にも増して重要なことなのだ。

「子曰く、君子は言に訥（とつ）にして、行に敏（びん）ならんと欲す」（『論語』）

『論語』の「里仁篇」における「訥言敏行」とは「君子とは口下手であっても行動は機敏でありたいと願うものである」という意味だ。孔子の求めるものは言葉ではなく行動であり、「君子はその言のその行いに過ぐるを恥ず（口先だけで行動の伴わない人こそ恥ずかしい）」

と、実践が伴わないことこそ恥だとした。

軽いノリで調子の良いことを喋っていても相手には軽薄にしか見えない。それならば、口数は少なくともやるべきことをきちんとやる人の方が信用されるだろう。ここで重要なのは「訥言（口下手）」ではなく「敏行（素早い行動）」だ。「有言実行」でも「不言実行」でも良いが、あくまで行動することが重要なのである。

「子曰く、古の学ぶものは己のためにし、今の学ぶ者は人のためにす」

孔子の創始した儒教は、宗教であり思想哲学であり学問であった。3,000人も弟子を抱えた孔子だったが、なかには出世の手段として教えを学ぶものがあることを「憲問篇」において嘆いている。つまり「昔の学ぶ者は、自分を磨くために学んだ。今の学ぶ者は人からよく見られたいために学んでいる」というのだ。

ビジネスでは人からの評価というのは重要だろう。しかし、人から良く見られたいと思っている人間の行動には下心が見えてしまうものだ。「自分磨き」と称して習い事をする人は多いが、果たしてそれは本当に自分のためなのだろうか？ いくら勉強しても、自分が求めていることはなかなか身につかない。「自分磨き」はあくまで自分のために行うもの。自分が好きで行っていることなら、他人の評価など気にならないものだろう。

参考資料：『中国古典百言百話4「孫子」』（村山学）PHP文庫、『中国古典百言百話7「論語」』（久米旺生）PHP文庫